

第8回日本公衆衛生看護学会学術集会

< 活動報告 > 最優秀演題賞

< 研究報告 > 最優秀演題賞

発達障がい児の支援の現状から母子保健を考える ～切れ目のない支援とは～

藤原 美佳, 佐尾 貴子, 森 絵美

愛媛県発達障がい者支援センター

【活動の目的】平成 28 年度発達障害者支援法の改正の中で、早期支援、切れ目のない支援の重要性が示されており、各市町の健診等における早期発見・早期支援体制が整いつつある。その一方で、当センターにおける相談は約半数が就学期で、相談者の関係機関も教育と福祉分野が中心となり、保健分野の関わりが希薄になっている。相談事例を通して、『母子保健における切れ目のない支援』の課題について考察した。

【活動内容】平成 30 年 12 月末現在の相談（実人員 585 人中、就学期 308 人）の中から、発達障がいの 2 次障害といえる登校渋り、不登校状態の事例 25 人を抽出した。対象となった 25 人の相談記録の中から、就学前、入学、進級時の引継ぎ、不登校のきっかけ、地域の支援体制をポイントに後方視的に分析した。

【倫理的配慮】個人が特定される情報については削除し、発表については所属長の許可を得た。

【結果】

(1) 不登校開始時期は、集団活動や学習内容がさらに難しくなる小学校高学年と、環境が大きく変化する中学校入学時が多かった。

(2) 改善がみられた事例では、学校以外の地域のより身近な相談機関でのきめ細やかな当事者・家族支援があった。

(3) 今回検討した「不登校状態」に至っている事例からは、母子保健・精神保健分野の保健師のフォローはみられなかった。

【考察】「切れ目のない支援」、母子保健法の中の「子育て包括支援」を発達障がい児に当てはめて考察した。事例の支援関係を分析する中で、県内の発達支援専門の相談窓口の設置は地域格差があるうえに、そこへも繋がらず、思春期の重要な時期を、学校、相談支援事業所、放課後等ディサービス等限定的な社会資源のみで対応していることや、家族支援が希薄な状況もみえてきた。身近な地域の保健師の支援は、早期発見に続くフォローとして、家族支援や将来起こりうる問題の予防には不可欠であり、個々の事例にみられる思春期特有の難しさには、母子保健や精神保健の視点も重要と考える。

多職種連携が必要とされている今、発達障がいの専門機関である当センターの役割を見直すとともに、保健、医療、福祉、教育等の各分野の役割について、切れ目のない支援を目指すために何が必要なのか、地域への課題提起をし、支援のあり方を検討していきたい。

【利益相反】なし

虐待予防におけるかかわりが難しい親との援助関係づくりに着目した保健師の支援技術

佐藤 睦子¹⁾, 大川 聡子²⁾, 上野 昌江³⁾

1) 淑徳大学看護栄養学部

2) 大阪府立大学看護学類

3) 関西医科大学看護学部

【目的】熟練保健師が虐待予防支援において、かかわりの難しい親との援助関係づくりに用いた支援技術を明らかにすることである。

【方法】

1. 期間：2017 年 5 月～2017 年 9 月

2. 対象及び方法：保健機関での虐待予防活動の経験が 10 年以上の熟練保健師 10 名に対し、かかわりの難しい母親の特徴や援助関係構築の方法について半構成的インタビューを実施し内容を質的帰納的に分析した。

【倫理的配慮】研究協力者に研究目的、方法及び自由意志の尊重と個人情報保護を口頭と書面で説明し、書面で同意を得るとともに大阪府立大学大学院看護学研究科研究倫理委員会で承認を得た（承認番号 28-66）。

【結果】研究協力者の平均年齢は 55.1 歳、経験年数の平均は 29.7 年で、全員女性であった。熟練保健師がかかわりの難しい親とした内容は、《自尊心が低い》《生育上の困難を経験している》《夫婦や実家の家族機能が弱い》《精神や知的な課題による生活のしづらさがある》《家事や育児に対する困難感がある》《他者に対する防衛的・攻撃的な姿勢がある》《適切な相談行動が難しい》《支援の受け入れが難しい》であった。親との援助関係づくりのための技術は、《最初の出会いを大切に》《歩調を合わせ伴走する》《見捨てない覚悟を示す》ことで支援の主体を親におき、時間をかけて暮らしぶりや成育歴から《生きづらさを見出す》《親の自尊心を高める》《出産・育児の環境を整える》《身近なロールモデルとなる》ことで、困難への支援と親の強みや変化を肯定し人間関係を学ぶ支援を提供していた。関係の深まりに伴い《親の課題に合わせたかかわりをする》ことで成長とつなげる支援が導き出された。

【考察】かかわりの難しい親との援助関係づくりに用いた支援は、基本的な支援技術を個別性に合わせ丁寧に実践したものであり、ケンブ(1976)等の研究結果との共通性が見いだされた。精神疾患患者への支援では、暮らしぶりから本人の状態像を見立て、困難を理解し共に解決を目指す支援(伊勢田, 2017)や、対人信頼能力獲得への支援(小林, 2017)があるが、本研究でも、親に伴走しながら心理社会的な苦悩を見出し、解決を目指す支援や、親の自尊心を高め成長を目指す支援を行うという共通性が見いだされた。このことから虐待予防支援においても精神保健福祉に関する知識や支援技術を獲得する必要性が示唆された。

【利益相反】なし。